論語や故事成語を活用した異文化理解教育の実践

前上海日本人学校虹橋校　校長
鹿児島県鹿児島市立西紫原中学校　校長　屋　田　伸　仁

キーワード：故事成語、ことわざ、異文化理解教育

1. はじめに

平成24年4月1日から平成27年3月31日までの3年間、上海日本人学校虹橋校校長として勤務した。異文化理解はその国の生活や文化をまず理解することが大切であるが、最初はどうしても日本と比較してしまう。日本は道徳や交通マナー、食べ物の安全、衛生環境等は世界トップクラスだと思う。中国に住んでいると、子どもたちの中には日本の優位性を感じ、相手国を低く見がちになる。また、赴任した平成24年は日中国交正常化40周年の年だったが、9月に尖閣問題で日中関係が急激に悪化し、中国国内の各地で反日暴動が勃発した。また、PM2.5の大気汚染や鳥インフルエンザも起こり、日本のマスコミも反中ムードが広がった。子どもたちもマスコミの影響を受けてマイナスの目で中国を見てしまいがちであった。異文化理解教育を通して中国の偉大さや素晴らしさを伝えることはできないかと思い、目をつけたのが、論語や故事成語だった。

2. 論語や故事成語を教育活動でどのように生かすか

平成24年は日中国交正常化40周年、平成25年は日中平和友好条約締結35周年の年だった。これは、現在の日中間の政治や外交の記念すべき節目の年であるが、年数から見れば、まだ半世紀にも達していない。しかし、2,000年以前から日本は中国大陸から漢字をはじめ、進んだ文化や生活様式等を取り入れてきた。その中国は4,000年という悠久な歴史を有し、孔子や孟子等の賢人や哲人を生んだ。論語や故事成語等、無尽蔵な知恵の宝庫に囲まれている。また、学習指導要領でも言語活動の充実を図り、古典や漢文の指導も求められている。そこで、「論語や故事成語を教育活動でどのように生かすか」をテーマに掲げ、全校朝会や学校だよりを活用した取組を実施し、中国の知恵や教訓を身近に感じ取らせるようにした。そこで、中国のことわざを活かした例をいくつか紹介したい。

(1)「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」(孟子)

3年間の思い出で一番印象に残っているのは、平成24年9月の運動会である。9月に尖閣問題で日中関係が悪化した。運動会実施も危ぶまれた。それでも学校は4月から「日中友好」をテーマに高く掲げ、運動会へ向けて取り組んできていたので、大多数の教員からこんな時期だからこそ、実施する価値があるという声が上がった。「災いを転じて福と為す」や「ピンチをチャンスに変える」力を感じた。そこで、公安当局や在上海総領事館等の関係機関の協力や支援をいただき、万全の安全を確保して、9月25日に運動会を実施した。危機管理や支援体制は万全を尽くしたとはいえ、校長としての責任や決断力の重みをずっしり感じながら、運動会当日を迎えたことを今でも鮮明に覚えている。幸い大成功の内に終えることができた。今振り返ると、異国の地で困難を乗り越えるためには、人の和や絆が大切だと強く実感した。あの東日本大震災の年に日本人が選んだその年の「今年の漢字」も「絆」だった。海外日本人学校で勤務する教員は、日本国内以上に日本人としての絆や和を感じるのだと思う。そこで、引用したのが孟子の「天の時は地の利に如かず　地の利は人の和に如かず」である。まさに孟子の言葉は人の和や絆を言い得て妙である。学校だよりや卒業式辞や色んなあいさつの場で引用したが、共感される人が多いことを実感した。

(2)「馬到成功」「一馬当先」

平成26年の干支は午（馬）年だった。馬は昔から中国人に愛され、また、生活の中に深く関わっていたので、「馬」に関する故事成語や四字熟語が多くある。春節に町の中を歩いていると、正月飾りを扱う売店で色彩豊か

な馬の年画を見つけたその馬の絵の下には「馬到成功」「一馬当先」が金分文字で装飾されていた。「馬到成功」は首尾良く成功するという意味で、「一馬当先」とは自ら進んで一歩先に事に当たることだ。北方のモンゴル人は草原を駆ける騎馬民族であり、一方の漢民族は米作を営む農耕民族である。モンゴル人は当時最新の騎馬戦法で弓矢を放ち、漢民族を征服するのに成功した。この故事成語は、成功するためには率先して道を切り開くことが大切だと言っている。この「馬到成功」「一馬当先」を 3 学期の始業式で干支の馬にちなんで話をした。また、上海日本人学校の高等部の 1 期生の卒業に寄せるメッセージでも引用した。そして、世界に先駆けて創設された高等部のこれからの活躍を激励した。現地校交流のあいさつや中国人との会話の中で、「馬到成功」「一馬当先」を引用して話すと、中国人にたいそう喜ばれた。

以下は平成 24 年度の月ごとの題材一覧と主な内容である。（※平成 25 年度、平成 26 年度は省略）

〈平成 24 年度〉

月	論語・故事成語を活用した講話と学校だより　　＊講話のねらい
4 月	■朋遠方より来たるあり、また楽しからずや（論語）＊本校の在籍数は 1568 名。日本全国、世界各地から新入学、編入学児童が集まっている。始業式では東日本大震災の復興へ向けて、日本人が大切にした「絆」を話し、虹橋校のみんなが仲良く、楽しく、心を 1 つにして頑張ろう。■学びて時にこれを習う　また説ばしからずや（論語）＊子どもたちが将来国際人として活躍する基礎を培うのが、日本人学校の役目。特色ある教育活動として、中国語、英語、現地校交流学習を積極的に推進したい。
5 月	■信なくんば立たず（論語）＊勉強やスポーツはやればできるという自信が大切、友達関係はお互いの信頼や信用が大切である。虹橋校には「5 つの生活のきまり」がある。きまりを守り、仲間を信じて、楽しい学校生活を送ろう。■百聞は一見に如かず（漢書）＊子どもの学校生活の様子は、聞くよりも目で見て確かめましょう。保護者への土曜参観の勧め。
6 月	■故きを温ねて新しきを知る（温故知新）（論語）＊北京の修学旅行（中国の悠久の歴史や史跡を訪ね、現在の中国・北京を知る。）■朱に交われば赤くなる＊ 5 年生の集団宿泊学習は温かい絆と団結力にあふれていた。良い環境が人をつくる。■備えあれば憂いなし＊地震と火災の避難訓練で、自分の命や安全は自分で守る。安全・安心の学校づくり。
7 月	■人と恭しくして、礼あらば、四海の内は皆、兄弟たり　（四海兄弟）（論語）＊本校の生活委員会では世界一を目指した朝のあいさつ運動を展開している。あいさつや礼がしっかりできれば、世界中の人々と仲良くできる。
8 月	■苟に日に新たに、日々に新たに、又た日に新たなり（湯王）＊長期の夏休みは生活リズムが崩れやすい。早寝、早起き、朝ご飯の生活リズムの推進と毎朝、心新たにがんばるという気持ちを持つ習慣は大切である。■己の欲せざる所を、人に施すなかれ（論語）■「恕」（思いやり）（論語）＊自分がされていやなことを人にしてはいけない。9 月に起こりやすい、いじめの未然防止、思いやりを大切にした人間関係づくり、学級づくりに取り組む。
9 月	■天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず（孟子）＊ 9 月は日中関係が最悪の状況になった。運動会は保護者や総領事館、公安等の関係機関の連携が無くては実施できなかった。困難を乗り越えるのは、人の「和」が一番大切。今回の運動会は日中国交正常化 40 周年を祝う運動会にもなった。
10 月	■蛍雪の功（晋書）＊秋の読書週間と「朝の 10 分間読書」のすすめで、中国の故事成語を紹介した。昔、中国で貧しい 2 人がそれぞれ、蛍の光や窓に反射する雪の光で、勉学をして、出世して立派な人になった。「ほたるのひかり、まどのゆき、ふみよむ…」の歌も紹介した。
11 月	■過ぎたるは猶お及ばざるがごとし（論語）■「中庸」（論語）＊校内持久走記録会での長距離走に必要なペース配分の取り方（中間のベストの走り）「中庸」の走りのすすめ　■切磋琢磨（詩経）　＊全教員が指導力や資質の向上のため研究授業を 1 人 1 回以上実践し、お互いの教師力アップのための授業研究（校内研究）にも取り組んでいる。

12月	■吾れ日に吾が身を三省す （論語）＊本年度（1、2学期）のまとめとして、学校評価と保護者評価を実施し、来年度へ向けて、PDCAサイクル（plan-do-check-act cycle）で改善に取り組んでいく。■兼愛（墨子）＊世界人権デーと校内人権週間の取組と本校の校訓「博愛」を重ねて、「兼愛」を紹介した。
1月	■歳寒三友（松竹梅）（論語）＊日本文化やしきたりで門松を紹介した。門松に松竹梅があるが、日本はお祝いの花木という印象がある。中国は、寒さや困難に負けない三友として捉える傾向が強い。寒さや困難に負けずに、たくましく生きる松竹梅を見習い、頑張って欲しい。■過ちて改めざる、是れを過ちと謂う（論語）＊テストを返されて、まちがいを直さないことが、まちがいである。3学期はまとめの1年間のまとめの学期。テストのまちがいの見直しと復習の徹底に努めたい。■過ちて則ち改むるに憚ることなかれ（論語）＊1年生で習ったことは1年生でしっかり身につけることが大切。次の学年に持ち越したり、積み残さないようにしよう。
2月	■吾れ、十有五にして学を志す（論語）＊2月4日は立春。昔の武家時代は、大人の仲間入りとして元服の儀式があった。現在で言えば立志式。孔子は15歳で学問の志を立てた。将来の夢や目標をしっかり持って学校生活を送ろう。 ■天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも（阿倍仲麻呂）＊百人一首の阿倍仲麻呂の作品は、唯一外国で詠まれた歌。本校は阿部仲麻呂週間の取組がある。遣唐使阿倍仲麻呂は日中友好の先駆者である。今年は日中平和友好条約締結35周年である。日本と中国の良好な関係を願いたい。
3月	■歳月 人を待たず（陶淵明）＊「光陰矢の如し」年月は非常に早く過ぎ去って人を待ってくれない。しばしもとどまることのない時間の大切さを感じるのがこの3月である。「6年生を送る会」「感謝の会」「卒業式」と行事を重ねるごとに6年生との別れ惜しさが募る。

3．日本の古典を活用した取組み

上海日本人学校では、阿倍仲麻呂を日中友好、日中交流の偉大な先駆者として、位置づけている。1月、2月に阿倍仲麻呂週間を設けている。

(1) 阿倍仲麻呂週間の取組「百人一首かるた大会」

「天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも」

阿倍仲麻呂は、19歳で遣唐使として中国（唐）に留学した。科挙の試験に合格し、数々の官位を歴任し、高い地位に就いた。玄宗皇帝にも見込まれた。在官中には李白や王維といった唐の一流の詩人たちとも交流があった。「天の原…」は、百人一首の中で唯一外国で詠まれた歌である。仲麻呂は遠い異郷にあって月を見て故郷に思いを馳せた。しかし、いざ帰国の途に着くも東シナ海の荒れ海で難破し、帰国できなかった。ついに中国（唐）で72歳の生涯を終えた。仲麻呂の業績を学び、日本文化にも親しめるようと、百人一首かるた大会を実施している。

(2) 校長企画―阿倍仲麻呂週間チャレンジイベント「百人一首10分以内で暗唱しよう！」

阿倍仲麻呂週間でさらに日本の古典文化に慣れ親しむように、校長企画で暗唱チャレンジイベントを計画した。冬の上海は1年の中で大気濃度が最もひどく、戸外に出れない日も多い。そのため、チャレンジイベントはPM2.5対策も兼ねている。期日は2月上旬の昼休み。場所は校長室。チャレンジ資格者は、家庭でお父さんかお母さんに10分以内で百首暗唱して合格をもらった人。1番から100番まで順番に暗唱し、10分以内で百首暗唱できた人は、表彰状と賞品をあげた。

結果は1位6年生（4分57秒）、2位6年生（6分38秒）、3位2年生（6分47秒）、4位5年生（6分50秒）、5位2年生（6分56秒）。子どもたちのひたむきな努力と無限の可能性を秘めた脳力に感動した。

4．「上海読本　第一集」（道徳読み物）の作成

文科省は道徳の教科化を検討し、早ければ平成30年度からの教科化を目指している。現在使用している「わたしたちの道徳」（文科省発行）は、道徳的規範となる偉人や有名人が多く取り入れられている。それに倣って、上海日本人学校の有志の教員が集まって「日本と中国の懸け橋となった人々」の読み物作成に取り組んだ。私は聖徳太子を取り上げた。遣唐使の阿倍仲麻呂よりも前に、聖徳太子は遣隋使小野妹子を派遣した。進んでいる隋

に学んで立派な日本を創ろうという聖徳太子の外交政策こそが、日中友好、日中交流の元祖だと思う。聖徳太子を含め、取り上げた12人の歴史上の人物は、以下のとおりである。

①聖徳太子―進んでいる国「隋」に学んで立派な日本を―　②阿倍仲麻呂―中国のために貢献した遣唐使―　③鑑真和尚―真の仏教を伝えようとした開祖―　④豊田佐吉―日中の懸け橋となった発明王―　⑤内山完造―どんな人にも平等であれ―　⑥山口淑子―中国への虹の架け橋を彩った日本人女性―　⑦西村真琴―結ばれた戦火の友情―　⑧伊吹山徳司―上海の港づくりに駈けた夢―　⑨空海―遣唐使の留学僧―　⑩大松博文―バレーボールチーム「東洋の魔女」の育ての親―　⑪田中角栄―日中国交正常化に尽くした首相―　⑫岡田武史―眠れる獅子に愛されたサッカー元日本代表監督―　その他、小学校低学年の作文から

２ヶ月に１回の割合で、作成委員会を実施した。内容は、学習指導要領の道徳の徳目に沿って、小学校下学年、上学年、中学校、高等学校の児童生徒に参考になる読み物を目指した。しかし、完成まで前途多難だった。人物選定で宗教や政治関係の問題はないか。著作権や人物写真の肖像権は大丈夫か。監修者はだれにするか。苦労して作ったのはいいが、日中関係の問題の火種になれば、大変である。今にして思えば、教員の有志でなく、学校運営委員会でプロジェクトを組めば関係機関との連携や諸手続き等もよりスムーズに行っていたと思う。さて、難産の末、出来上がった完成本は現在、学校の図書室に備えて活用を図っている。

5.「和を以て尊しと為す」（孔子・聖徳太子）

鹿児島県の中国誘客特別対策事業により、６月に県観光課から上海の中学校との交流の依頼があり、快く承諾した。上海文綺中学校１年生40名が７月５日から11日まで、福岡から熊本、鹿児島、大阪、神戸、京都を巡る修学旅行の中で、８日に本校との交流活動を実施した。文綺中は校歌斉唱、ハーモニカ、竹笛演奏があり、中でも「涙そうそう」の歌や「さくら」の竹笛は感動的だった。本校は、けん玉や合唱を披露した。そして、英語を使った集団ゲームは自己紹介活動で更に親睦を深めた。校長あいさつでは、日本の聖徳太子や中国の孔子を紹介して、２人の賢人、聖人が述べる「和」を紹介した。子どもたちには国際交流経験を通して世界で活躍する日本人、「和」を大切にする国際人になって欲しいと願う。

上海文綺中生徒といっしょに

日中の政治や外交問題が困難な場合でも、学校間の交流活動は日中友好で取り組むことが大切だと思う。

6. 終わりに

毎月、論語や故事成語の話を全校朝会で話していると、子どもたちの中には興味関心を示す児童も出てきた。５年生の女の子から「校長先生は論語が好きだから」と言われて隷書体で書かれた自筆の書き物をもらったり、またある母親は悩んで落ち込んでいるとき、息子から全校朝会で聞いた「人間万事塞翁が馬」の話をしてくれて、元気になったという話も聞いたりした。私自身も論語の意味や故事成語の由来を考えながら、全校朝会で話したり、学校だよりを毎月書いたりするのは楽しくてやりがいがあった。おかげで中国の歴史や文化について理解を深めることができた。また、中国の懐の深さに畏敬の念も感じたりもした。故事成語やことわざは、異文化理解教育に大きな効果があることを実感できた。現在は、鹿児島市内の中学校に勤務しているが、校長講話や学校だよりでも日本と中国の古典を活かした実践に取り組んでいる。